

《Seiry's Global Commons: An Uncommon Experience》

留学での学びと将来の目標

萩中 春乃[†]

私が留学で学んだことの1つは、第二言語としての英語の存在についてで、ネイティブのように話す必要はないと気付いた。マレーシア人の多くはマレー語や中国語などが第一言語であり、英語は第2言語として使用している。それは、多国籍国家のマレーシアではみんなそれぞれの第一言語があり、それが違えばコミュニケーションが取れないので、英語を共通語として使う必要があるからだろう。つまり、英語はコミュニケーションツールの1つということだ。私も英語をそのように用いる1人だが、今までは英語のネイティブ話者のように話すことを目指していた。しかし、マレーシアにきて、誰もネイティブのように話そうとはしておらず、むしろ“伝えること”にこだわっていると気が付いた。正直、私にとっては、発音が聞き取りやすいわけではなかったが、無理して難しい単語やスラングを使ったり、ものすごく早く流暢に話したりしようとするのではなく、お互いが通じ合う努力をしているように思えた。それに影響され、留学後の英語学習の目標が「ネイティブ話者のように話すようになる」から、「よりよくコミュニケーションが取れる」に変化した。

次に、私の将来の目標について述べたい。私の将来の目標は、中学・高校の英語教員だ。自分の経験と、英語に関する様々な視点からの知識を活用して、英語を学ぶ子供たちをサポートしたい。留学前はそれでよいのかと悩むことも

多かったが、2年次の学びを通して、またいろいろと熟考した結果、この将来の目標は定まり、今は英語教員を目指して日々学んでいる。決心したきっかけは次のとおりである。まず、私は英語と教えることが幼いころから好きだったことだ。実際に中学生のころ、私は「学校で友達に英語を教えてあげて、分かってもらえてうれしかった」と話していたそう。そして、今でも変わらず、教えて分かってもらうことが私にとって最高にうれしいことになっている。さらに、子供たちの心理面のサポートにも興味がわいたことがある。学校カウンセリングを専門とする先生の実体験を聞いて、その気持ちがめばえた。その先生がまるで子供の心を操るかのように悩みを聞き出し、その子にぴったりと当てはまった解決法を打ち出していたことに私は感銘を受けた。私も生徒に寄り添っていきたいと思った。このようなことから、英語と教えることが好きで、子供たち（の心）に寄り添いたいのなら、やはり学校の英語教員を目指すべきだと思い、その道に進もうと決心した。

現在は、英語教員にふさわしい英語の知識とわざを身につけるために、高校までの文法や単語を復習している。必要な英語の知識が不足しないようにすることはもちろんだが、目指すは「英語に関してなら萩中先生に聞けば間違いない!」と頼りにされるほどの英語のスペシャリストになることだ。容易でないことは確かだが、日々目標に向かって好きなことを勉強でき

[†] 3rd year undergraduate, Faculty of Humanities, Kanazawa Seiry University

ることを幸せだと感じ、楽しんでしている。まだまだ学ばなければいけないことは山積しているが、1歩1歩理想の自分になれるように頑張っていきたい。